〈教育と社会〉研究　第25号　2015年

書評：小林千枝子著『戦後日本の地域と教育 ―京都府奥丹後における教育実践の社会史―』

一橋大学大学院博士後期課程　菊　地　愛　美

「地域の教育力」の低下が叫ばれるようになって久しい。地域の教育機能が本格的に問題とされ始めたのは、経済成長によって地域（社会）や生活が急激に変化した1960年代頃からであろう。「地域と教育」をテーマとした様々な研究・実践が展開し、学校の負担の増大とともに地域（社会）の変化が危惧された。本書が対象とする京都府奥丹後地域の「地域に根ざした教育」もそうした時代状況の中で生み出された教育実践である。

本書は、「共同体文化の衰退」（８頁）とその中にあった「子どもたちの育ちの場」（12頁）の変貌に学校教育が対処せざるを得なくなった高度成長期を対象に、「奥丹後地域を研究フィールドとして、地域と教育のありうるかかわりとしてどのようなことが展望されうるのかを明らかにすること」を課題とし、「その際に、特に到達度評価が介在することに意義があるのか、あるとすればそれはどのようなものかを考察する」（19頁）ことを目的としている。特に後者については「到達度評価の、教科指導や授業改善にとどまらない理論的可能性」（107頁）を探ることが目指されており、「学力保障」に重点をおいた従来の到達度評価論の見直しを図ろうと試みている。

本書の構成は、序章「『地域と教育』という問い」に次いで、第Ⅰ部「奥丹後の生きられた戦後史」、第Ⅱ部「父母や教師たちの群像」、第Ⅲ部「教育実践の諸相」、終章「戦後日本の地域と教育－到達度評価に注目して－」となっている。

第Ⅰ部では、高度成長が奥丹後地域に与えたインパクトとともに、機業を中心とした産業構造への転換、過疎化と青少年の進路動向、それらに直面する教師たちの教育研究活動や教育運動が７つの章により整理されている。村を「捨てる」のか「残る」のかという具体的な「進路問題」が、地域産業をめぐる親・子・教師それぞれの評価を介しながら、教師たちにおいては「村を解放する学力」（86頁）の追求という学力論へと収れんされていく過程が描かれている。第Ⅱ部は、保護者と教師の「群像」を描いた６つの章から成る。教育実践のみならずさまざまな地域活動に関わりながら展開された教育実践・運動の様子が、実践を牽引した教師たちの「生き方」に注目して論じられている。第Ⅲ部では、久美浜町立川上小学校と峰山町立峰山中学校の教育実践を、それぞれ到達度評価との関わりで分析している。両校は、到達度評価導入以前から独自の精力的な教育実践を展開する学校として注目されていた学校である。川上小学校においては「地域に根ざした教育」、峰山中学校では「目標学習」として知られる取り組みであるが、それと到達度評価との関わりと展開の道筋が明らかにされている。終章では、奥丹後の教師たちが、「分かる授業づくり」のみならず、家庭や地域社会の人間形成力の回復にも注力したこと、さらに教師が保護者や住民からの信頼を得ることによって学力育成に専念できるようになっていったことが結論付けられている。そして、これこそが「教育の住民自治」を基本にすえた「学校教育の本来のあり方」（412頁）であり、「地域や住民自治、生活指導への着眼と到達度評価とが結びついた実践的成果」（413頁）であったと評している。

本書の特徴は、地域（社会）を舞台にした教育実践の奥深さと複雑さを当事者たちの言葉を用いながら豊かに伝えていることであろう。地域住民の生活の厳しさとたくましさ、教師たちの課題意識と試行錯誤を鮮やかに伝えているのは、著者が「現地主義」と記しているように、詳細な聞き書きゆえだと思われる。

これらも踏まえ、本書に対する評者なりの理解と課題を以下に示す。評者の関心としては、他にもいくつかの疑問をもった―たとえば、川上小学

校における「到達度評価と『地域に根ざした教育』の二本立て構想」（294－295頁）の詳細や、労働教育が「旧共同体志向を象徴するもの」（295頁）としてのみ捉えられており、当時の「労働」をめぐる思想的な整理が不足している点、また、戦前の「郷土教育」と「地域」概念の接続の仕方など―が、紙幅の関係上２点に絞って述べる。

まず、本書の方法論についてである。「現地主義」という方法論はおそらく聞き書きと一次資料の重視ということであろう。第Ⅰ部、第Ⅱ部に明らかなように、当事者からの史資料が当時の状況や人物像を豊かに伝えている。そこには、著者の奥丹後地域への思い入れとともに地域や教師たちがもつ「魅力」（142頁）が散りばめられている。この「魅力」が当時の奥丹後の教育実践にもその力を発揮したとするならば、当事者でない私たちがそれをどのように分析・叙述していくのかという点が教育実践研究の醍醐味になるだろう。また「こうした社会の変化を基底として、教育の実際面において何が問われ、その問われる過程で生み出された実践にどのような可能性が潜んでいたのかは、生活史まで捉えないと見えてこない」（412頁）と著者も述べているように、教育実践や教育運動を論述していく際には、当事者の思想・生活レベルへの言及とともに、それを歴史として位置付ける作業が意識的になされる必要があろう。具体的には、特に第Ⅱ部の「群像」に描かれた教師や地域住民の「生き方」が、高度成長期の何を象徴し、どのような変化を促すことにつながったのか、すなわち、その事実をどう解釈すればよいのか、それが「社会史」としてどう機能しているのかという点について、著者による詳細な分析・解釈の助けを借りたかったというのが率直な感想である。

これはおそらく本書のタイトルでもある「戦後日本の地域と教育」というテーマの広がりと蓄積をどう捉えるかという点とも関わる。例えば、敗戦直後に各地で展開した地域教育計画は、戦後教育史における「地域と教育」との関係性を探る起点であったと思われる。また、「地域と教育」は、今日の教育学研究においてもなお重要な位置を占めているものの、教育社会学、社会教育学、環境教育学、教科教育論等、様々な領域で取り上げられている曖昧模糊たるテーマでもあろう。人間が地域（社会）から離れては育ちえないという事実からすれば、あらゆるものがその対象となりうる。こうした「地域と教育」がとってきた多様な関係性を踏まえると、本書はやや限定的な関係性を描いているのではないかと思われる。もちろん、本書では、「学校教師が地域の人間形成に関与する場合に限定して、その可能性や課題を考察していく」（19頁）と自覚的であるし、地域と教育との関わり方を５つに分類して整理している点（16頁）からは、さまざまな関係の取り方が想定されていることがうかがえる。それでもやはり評者には、「戦後日本の地域と教育」という広大なテーマが含みもつ「地域（社会）」概念の複雑さ―具体例を出せば、戦後の地域教育計画や郷土教育、各種の地域教育運動などと、本書が扱う「地域に根ざした教育」との関係―についての分析と解釈を切望したくなるのである。

２点目は、教育実践の「事実」を描くことと理論的可能性の「根拠」を求めることの区別をどうつけるかという点である。奥丹後の教育実践として何がつくられたのかという視点と、到達度評価の理論的可能性の根拠が存在したという視点とでは、描き方が異なるだろう。少なくとも評者には、両者が混在した叙述の中で、著者の解釈の根拠を読み取ることが非常に難しかった。

本書が対象とした奥丹後は、「地域に根ざした教育」と「到達度評価」という２つの実践によって有名な地域であった。本書の主要な課題は、この２つの実践の接続の論理とその理論的可能性を探ることにあったと思われる。従来、それは「地域を志向する教育」と「学力保障―すべての子どもにたしかな学力を―」がどのように接合可能かという問題として捉えられており、両者は「相容れない」ものと評価されがちであった。それに対し、本書は到達度評価が持つもう１つの側面、つまり「教育を教師が計画的に策定して積み上げていくことを促すもの」（412頁）と捉えることにより、「地域を志向する教育」と「教育の計画性・教育の評価」という図式に再定位し接続させたと評者は解釈した。これにより本書は、到達度評価論を教科教育から解放する可能性―生活指導への活用―を、奥丹後の事例に見出している。ただ、この結論を導く前に、到達度評価論はその内に「教

育の計画性」「教育の評価」という視点をそもそも含み持っていたし、一般的な理解だったのではないかと評者は思う。本書では、これを川上小の教師たちの「卓越したとらえ方」（299頁）として評価しているのであるが、「教育実践の社会史」研究としては、その「卓越性」を評価する前に、教師たちをそこに至らしめた諸条件の分析・解釈が詳細になされる必要があるのではないだろうか。つまり、到達度評価という理論と実践との相互作用―到達度評価論が当初どう紹介・解釈され、教師たちはなぜ「計画性」に共感したのか、そしてそれは教師たちのどのような反省とねがいを引き受けたものであったのか―について、当時の社会状況も踏まえた詳細な分析を試みることによって、理論的可能性への提言が開かれるのではないかということである。終章における奥丹後の教育と現代の「総合的な学習の時間」や「戦後初期の理念の重要性や有効性」（414－415頁）の提起との接続の仕方についても同様のことが指摘できる。

そのことは、教育実践研究が教育理論と実践の構造的な関係把握にいかに寄与しうるのかという点への示唆にもつながるだろう。教育実践をいかに分析し叙述していくのかという研究方法を考える上で、評者自身にとっても非常に示唆的な著であったことを最後に付け加えておきたい。